〔萬葉集二十〕陳私拙懷一首幷短歌

海原乃、由多氣伎見都々、安之我知流、奈爾波爾等之波、倍努倍久於毛保由、

右二月○天平勝寶七歳十三日、兵部少輔宿禰家持、

〔日本後紀二十四 嵯峨〕弘仁六年十月庚子、安房國獻蘆二枝、長各三丈、圍一尺、

〔續日本後紀十九 仁明〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十、奉造聖像卌軀、○中略副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃、野馬臺能國遠、賀美倭伎能、宿那毗古那加、葦菅遠、殖生津志津國、固米、造介牟與理、○下略

〔拾遺和歌集九 雜〕つのかみに侍ける人のもとにて　たゞみ

難波がたゑげりあへるは君が代にあしかるわざをせねばなるべし

〔枕草子三〕草の花は

あしの花さらに見どころなけれど、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらんとおもふにたゞならず、もじもすゝきにはをとらねど、水のつらにておかしうこそあらめと覺ゆ、

〔大和物語下〕なにはにはらへして、かへりなんとする時に、このわたりに見るべきことなむあるとて、いますこしとやれ、かくやれといひつゝ、このくるまをやらせつゝ、家のありしわたりを見るに、やもなし人もなし、いづかへいにけんと、かなしうおもひけり、○中略ゑばしといふほどに、あしになひたるおとこの、かたゐのやうなるすがたなる、このくるまのまへよりいきけり、これがかほをみるに、その人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、わがおとこにたり、これを見てよく見まほしさに、このあしもちたるをのこよばせよ、あしかはんといはせける、さりければ、ようなきものかひ給とは思ひけれど、ゑうののたまふ事なればよびてかはす、車のもとちかくになひよせさせよ、見んなどいひて、この男のかほをよくみるにそれなりけり、いとあはれに